

第一部 講演者スピーチ

リーナ・マイセン氏：

皇后陛下、ご列席の皆様、そして私の友人と同僚の皆様こんにちは。
国際子ども図書館並びに JBBY(日本、国際児童図書評議会)のお招きにより参りました。IBBY(国際児童図書評議会 以下 IBBY)の極めて重要な活動の一つである国際アンデルセン賞について、また去年の IBBY50 周年バーゼル大会会期中に行われ、私が企画した展示会についてお話しさせていただけますことを感謝いたします。

なぜ今、国際アンデルセン賞なのでしょう。毎年世界各地で何百もの賞が児童文学の作家に、また画家に与えられています。その多くには多額の賞金が伴います。それではなぜ多額の賞金も付与されない国際アンデルセン賞があまたある賞の中で卓越した賞として特別視されているのでしょうか。作家や画家はなぜ国際アンデルセン賞を児童文学の分野における最高峰であると考えているのでしょうか。

IBBY の創始者であり伝説にもなっているイエラ・レップマンは、IBBY が彼女の想定したとおりの質の高い児童文学の評価、推進、普及において世界の権威になるためには、傑出した本を識別するための手段やプログラムが必要だと認識していました。そのような賞は児童文学という過小評価されたジャンルの評価を高め、また世界中の子どもが、永続的で普遍的な価値を持つと判断され、国際理解の橋渡しの役目を担う本に近づき、共有することを可能にします。さらに世界中の児童文学の作家を称え、意欲を起こさせるきっかけとなるのです。そのためいくつかの審査基準が設定されなければなりません。

1950 年代初頭、国際アンデルセン賞の創設は児童文学の分野で国際的に熱烈に歓迎されました。現在採用されている審査基準が設定されるまで多少の時間がかかりました。1956 年、1958 年、そして 1960 年の最初の 3 回の受賞は、傑出した作家の、その当時発表された本 1 冊に対して与えられました。エリナー・ファージョンの『ムギと王さま』、アストリッド・リンドグレンの『さすらいの孤児ラスムス』、エーリヒ・ケストナーの『わたしが子どもだったころ』です。しかし、3 人の作家が生涯にわたって児童文学への貢献したことが称えられているのは明白でしたので、

IBBY は近年発表された本だけでなく作家の全業績を評価するために審査基準を変更する運びとなりました。審査基準の変更により、IBBY は徐々にその活動範囲を拡張し、オーナー・リストを新設することになりました。オーナー・リストとは、IBBY 各国支部が、近年出版された本の中から内容・イラスト・翻訳が優れた物を選出し、推奨しているものでありますが、この数十年、ますます重視されるようになりました。国際アンデルセン賞によりその全業績を認められた最初の作家はオランダ生まれのアメリカ人作家、マインダート・ディヤング、並びにフランス人作家のルネ・ギヨです。

1966 年は国際アンデルセン賞にとって非常に重要な年でした。作家賞と画家賞が平行して授与されることになったのです。児童図書のイラストと絵本作家に対して高まる評価を反映しての決断でした。初の画家賞はスイス人画家のアロイス・カリジェに贈られました。愛する故郷であるスイス・アルプスを舞台にしたストーリーは現地では古典として親しまれており、日本語訳も出版されています。

国際アンデルセン賞は、その後「小さなノーベル賞」と呼ばれるようになりました。児童文学における最高峰、最良の中の最良、傑出しているということを示唆するこの呼び名を関係者一同気に入っております。文学上の功績を評価するという面では国際アンデルセン賞はノーベル賞に共通しておりますが、審査基準は異なります。ノーベル文学賞受賞者はスウェーデン王立アカデミーの会員によって選定されます。スウェーデン国王陛下によって毎年授与され、多額の賞金が付与されます。12 月に行われる授賞式はスウェーデンにおける最も栄誉ある社会的行事です。

国際アンデルセン賞は二年に一度、IBBY 大会の開会式で授与されます。受賞者には金メダルと賞状が贈られます。デンマークのマルガレーテ二世女王陛下が国際アンデルセン賞の名誉総裁であります。受賞者にご祝辞は頂きますが、授賞式にはご出席されません。出身も、話す言語も違う男女から構成される国際審査委員会により、国際アンデルセン賞の受賞者は選定されます。審査委員は IBBY 各国支部の候補者の中から審査委員長の推薦により IBBY 理事会によって選定されます。

スウェーデン王立アカデミーは選抜候補者リストを発表ませんが、国際アンデルセン賞は各国支部によって作成された候補者リストを世界中に公表します。メンバー全員がその経済的規模や人口に関係なく指名権を有し、各国支部がそれぞれ各賞一名ずつの候補者をノミネートできるという民主的な手続きが規定されています。

しかしながら、ノミネートされる際に経済力が影響する場合があります。各国支部全てが均等な機会を与えられてはいるわけではないのです。推薦のための本の購入、関連資料の作成、本の購入と配送手続き等の費用に援助金が提供されない各国支部にとってはその費用は膨大になります。幸運なことに、ほとんどの場合、候補者の出版社にとってノミネートされるということ自体が荣誉であり、類のない宣伝効果があると判断されるために本が寄付されます。しかしながら、日本のように確固たる支部をもっている国や、確立された児童図書出版の伝統を持っている国の方がノミネートに関して有利であることは事実です。

他にも不均衡はあります。それは、我々の視点から見れば国際アンデルセン賞を受賞するに値する作家や画家で未だ受賞していない方々がいるということです。ノミネートが時期尚早であった、提示のされ方がよくなかった、または生存中に候補者として挙がらなかった、などの理由が考えられます。審査委員は各国支部によってノミネートされた候補者の中からしか選定することができないのです。

私は1972年から2002年まで過去30年間にわたり、2年に一度行われる国際アンデルセン賞の全審査委員会に出席してまいりました。すばらしい名誉であると同時に世界各国の最高の児童文学に触れる素晴らしい機会です。私自身も多くのことを学びました。現在公開中である1956年から2002年までの国際アンデルセン賞受賞者の展示会を企画するにあたり、審査委員会で得た知識を活用することができました。まだ展示会をご覧になっていない方もいらっしゃると思いますので、ここでオリジナルの英語版と翻訳版である日本語版のカタログをご紹介します。

過去の審査委員と現在の審査委員に大きな格差があるのかと言えば、そうではありません。それほどの違いはなく、審査委員は常に献身的で著名な方たちの集まりです。同僚の意見にも

興味を持って耳を傾けます。もちろん、自国の候補者を推薦しようとする委員もいますし、下調べをより入念にして来る人もいます。しかし通例、審査はとて基準が高く、意思決定は単独でなされます。

審査委員にとって困難なことの一つに、自分が知らない言語で書かれた本の評価があります。その際、補助資料と翻訳を受け取り、さらに助言を求めることになっています。以前に比べ今日の関連資料、必要書類の質は非常に上がっています。候補者の重要性や良質さを見極めるために、性質を判断するために欠かせない資料です。

以前は、ノミネート数自体が現在と比べ格段に少なかったのです。1972年には、作家12名、画家10名がノミネートされていました。2002年には28名の作家と27名の画家がノミネートされました。両カテゴリーの提出された作品全てを吟味しなければならない審査委員の負担があまりにも大きくなったため、2002年から審査委員を2つの部門に分けることになりました。5名ずつの部門に分け、片方は作家を、もう一方は画家を審査することになりました。今日ここにお越して、後ほど講演をなさる当時の審査委員長であるジェイ・ヒール氏の提案によってこのシステムが導入されました。

審査委員がそれぞれの分野においてたった一人の受賞者を選定する際に苦悩する様子を出席した審査委員会のほとんどの場面で、目の当たりにしました。甲乙つけがたい候補者を前に最終選考では張り詰めた空気が漂います。過去に一度だけ、1968年にスペイン人のホセ・マリア・サンチェス・シルバとドイツ人のジェームス・クリュスの作家賞ダブル受賞がありました。しかし、二名が受賞することは理想的な状況ではないので、現在では票が割れた際には審査委員長が決定票を投じることになっています。票が割れるということはよくあります。一人を選定するということが非常に困難であるため、審査委員は何名かを受賞者として選ぶことができれば、どんなに気が楽だろうと感じるようです。

過去に慣例として複数の激励賞の授与が行われたこともありますが、私は寛大すぎると感じていました。激励賞というものの定義が曖昧でしたし、その賞を受賞した人たちが次点者であったという誤った印象を与えてしまいました。1996年に賞の独自性を強調するという目的で激励賞は

廃止されました。しかしながらその後も審査委員が1名以上の候補者を表彰する手段を希望したため、1998年よりそれぞれの分野で最終選考に残った2,3名を最終候補者として発表することとなりました。

審査委員の意思決定までのプロセスを見守ることは非常に興味深いことです。審査委員のほとんどは英語圏出身ではないために英語で自分自身を表現することに苦心しますが、それでも非常に雄弁な発言と興味深い見解が交わされます。予備知識や言語上の利点からより親しみやすい候補者が多くいますが、それでも審査委員は公平さを期して作家の真の価値にまで到達しようとします。知名度の低い文化圏の作家や画家を正当に評価したいと強く望んでいるのです。だからこそ、私は政治的な圧力が少ないということに常に感銘を受けています。ここで政治的というのは、例えば「次はアフリカの作家が、または中国の画家が賞を受ける番だ」という意味です。私個人は可能な限り多くの国々から受賞作家が出ることを望んでいるのですが、歴代審査委員長長の偉大な知恵の賜物により審査委員一人一人が厳格な文学上のまたは芸術上の基準に沿って審査するよう定められています。

過去50年間の受賞者の面々を思い起こしてみますと、審査委員はあらゆるジャンルのあらゆる潮流を代表する作家を選出するという、賞賛に値する業績を残しました。受賞者は全文化圏の文献文化財に属しないとしても、真の普遍的特性を備え持っている人たちです。ある年の受賞者が、日本人作家のまど・みちおのように詩や童謡で有名であったり、ジェームズ・クリュスやオランダ人作家のアニー・M・G・シュミットのように少年向けの面白おかしい本で著名であったりしても、そこにはなんの矛盾もないのです。ルネ・ギョやスコット・オデールなどはその異国情緒あふれる冒険物語で知られている作家ですし、ポーラ・フォックスやトルモ・ハウゲン、エイドン・チェンバースなどは洗練された十代向けの作品で有名です。

国際アンデルセン賞の受賞者の多くは非常に忘れがたい登場人物を生み出しています。例えばデンマーク人作家のセシル・ポトカーの描くシリーズに登場する、自由を求めるアウトサイダーであるシーラスという名の男の子などがよい例です。イスラエル人作家のウーリ・オルレブの非常に感動的な半自叙伝小説にはホロコーストの生存者であるユダヤ人の少年少女が主役として登場します。アメリカ人作家のキャサリン・バターソンは様々な歴史的、地理的設定の下、極めて

魅力的な登場人物が逆境の中で成長する姿を描きます。中でも、*The Sign of the Chrysanthemum* は最もよく知られている作品で、バターソンが数年間を過ごした日本が舞台になっています。

日本で絶大な人気を誇るトーベ・ヤンソンやパトリシア・ライトソンなどは自身の空想の世界を作り上げた作家です。ヤンソンの著書に描かれている自然の力は正真正銘北欧のものであり、ライトソンの著書はオーストラリアの先住民アボリジニーの神話に基づいています。ヴァージニア・ハミルトンの著書はアフリカ系アメリカ人の起源を紹介していますし、ブラジル人作家であるリギア・ポシュンガ(ヌーネス)やアナ・マリア・マシャドの著書はラテン・アメリカの文学的、政治的起源に由来するシンボルや隠喩を起用し、魅惑的なリズムを特徴としています。同様に受賞者の一人であるマリア・グリーベの作品の多くは現実と幻想が入り混じった手法が用いられており、もしかするとこのことが母国スウェーデンよりスペインやラテン・アメリカで彼女の人気の高い理由かもしれません。

アストリッド・リンドグレンは、その人間的魅力と作品で、並外れた注目を集めており、その事は同時代の文学者にとって不利であったと言えます。リンドグレンはスウェーデン国民のグランドマザ的存在であり、強く愛され尊敬されている人物です。彼女のように変わりゆく価値観論争において、公的、政治的役割を果たした作家は数名います。例を挙げますと、第二次世界大戦前後のドイツにおけるエーリヒ・ケストナー、またイタリア左翼の代表であり傑出したジャーナリストであるジャンニ・ロダーリ、1960年代から70年代にかけて社会的変革と子どもの人権において影響力をもっていたクリスティーネ・ネストリンガーなどです。彼らはモラリストでありながら素晴らしいユーモアのセンスを兼ね備えた人物で、ヨーロッパでは彼らの作品は第1級とみなされています。ポフミル・ジーハが受賞した1980年、彼はチェコの文壇において作家としてだけでなくIBBYのチェコ支部の会長としても尊敬されている人物でした。

画家賞に関して言えば、興味深いことに子どもの本のイラストが果たす役割について審査委員の間で基本的な理解の相違が見られます。つい最近も、ある審査委員が既存の与えられた文章にイラストをつけることが画家の本質的で望ましい姿であると発言しました。画家は作家に力添えをし、ストーリーを視覚的に引き立てるが、あくまでも補佐役として、補助的なクリエイター

としての役割を果たすにとどまる、ということです。対照的に、絵本の作者は自分の視覚でもって、この審査委員の言葉を借りれば、主観的なストーリーを作り出すのです。多くの画家は両方の分野で活動していますし、絵本を制作する際、作家と画家の多くは非常に密接な関係で仕事をしますので当然のことながらこういった線引きは成り立たないと思います。それで私は国際アンデルセン賞におけるアプローチの違いについて考え始めました。

画家賞の受賞者の中で、誰が主に文章のイラストを描き、誰が主に絵本の作者なのでしょうか。受賞者のほとんどは、自身のストーリーを制作すること、また作家と密接な関係で仕事をする、さらには既存の文章(多くは古典的なおとぎ話)にイラストを描くこと等、あらゆるタイプのイラストを描くことに抵抗は感じていないということです。デンマーク人の画家イブ・スピング・オルセンやスヴェン・オッターは多才な画家です。両氏とも自身の絵本を制作する傍ら、アンデルセン童話のイラストを描いた経験があります。オーストラリア人のロバート・イングペンやスイス人のイェルク・ミュラー、そしてイギリス人のクエンティン・ブレイクは作家との共同の仕事においても、また単独でも甲乙つけがたい独創性を持った多才な画家です。

もしかするとモーリス・センダックが、現代では卓越し、また影響力を持った絵本画家であるといえるかもしれません。『かいじゅうたちのいるところ』の初版が出版されて以来、自身のビジュアル・ワークの制作と同時にグリム童話のイラストも描いてきました。トミー・ウンゲラーはセンダックと同時期の1960年代に活動を開始した典型的な絵本作家ですが、彼もヨハンナ・スピリの「アルプスのハイジ」や、おとぎ話のイラストを描いています。安野光雅やクヴィエタ・パツオウスカーは自身の非常に独創的なビジュアル世界を確立しました。それをパツオウスカーは「絵と言葉による建築」と表現しています。とはいえ、パツオウスカーはグリム童話の、安野は日本昔話のイラストをも描いています。イギリス人のアンソニー・ブラウンは元来絵本作家でしたが、他の仕事と平行して「ヘンゼルとグレーテル」や『不思議の国のアリス』の再解釈を行いました。一方でオーストリア人画家リスベート・ツヴェルガーは同様の作品のイラストや他の古典的作品のイラストを多く手がけましたが、彼女自身の本を著したことがありません。彼女は、既に没している作家のストーリーを手がける方が自分の創作力を自由に駆使できるからよい、と言ったと伝えられています。

1950年代から60年代にかけて人形映画で有名になったチェコ人のイジー・トゥルンカも古典

的作品や民話などのイラストでよく知られています。彼はアンデルセン童話の本質を見事に捉えています。ロシア人のタチヤーナ・マーヴリナはプーシキンによって再話された民話のイラストを鮮やかな色彩で描きました。イラン人のファルシード・メスガリーは、伝統的なペルシャ民話をモチーフにして、斬新なレイアウトやデザイン見せました。今回の展示会に彼のたくさんの絵と原画が展示されています。赤羽末吉は日本昔話とモンゴルの民話、それから伝統的な日本画にインスピレーションを得ています。ズビグニェフ・リフリツキは『オズの魔法使い』を描いただけではなく、母国であるポーランドの民話も描いています。ドイツ人のクラウス・エンジカートは、自分は作家のパートナーであると考えているが画家は文章よりも一歩遠くへ読者をいざなうことができ、と言います。スロバキア人の画家であるドゥシャン・カーライは彼なりの解釈で描いた『不思議の国のアリス』で有名になりましたが、近年、日本の出版社と仕事をしました。現在はチェコの出版社のためにアンデルセン童話全体のイラストを手がけると言う大仕事に着手しています。

次に今回の展示会図録に掲載する本の選定についてお話ししたいと思います。審査委員長であったエヴァ・グリストラップと私がこのプロジェクトをコーディネートしたのですが、このカタログの発行にあたり最も困難だった点は、受賞者一人につき全作品の中から5作品しか選定できないということでした。私たちは最も代表的であると思われる原語で書かれた、ここが重要な点ですが、作品5作を全作品の中から入手可能であれば初版で、あるいは再版されたものの中から選定しました。そしてさらに現在活動中の受賞者の最近の作品も含めるようにしました。出版社や世界中のあらゆる組織に連絡を取り、絶版になっている本を探し出しました。

私たちのプロジェクトを誠心誠意サポートして下さるたくさんの作家や画家の方からお返事をいただき、大変感激いたしました。受賞者の多くの方は私たちの選定に全面的に合意し、ご自身のコレクションの中から著書を送って下さる方もいらっしゃいました。イブ・スピング・オルセンは私たちの提案に対し何度も考えを変え、非常に興味深い意見交換が持たれました。ウーリ・オルレブが原語であるヘブライ語での表紙が気に入らないと言ったにも関わらず、私は英訳版ではなく原語版を使用すると主張しました。結果的に彼も同意し、未発表の最新作の原稿のコピーまでも私たちの元に送ってくださったのです。

カタログに載っているものの表紙と展示会に展示されているものを比べていただければわかり

ますように、展示用の原版を探ることが困難であったということがお分かりいただけると思います。オリジナルのハードカバーが入手出来なかったためペーパーバックを展示しているものもあります。極めて貴重な、アストリッド・リンダグレンの『長靴下のピッピ』やトーベ・ヤンソンの『ムーミン谷の冬』などの原版を拝借できたらどんなに素晴らしいでしょうか。今日の光沢のある商業的な版よりも数段美しいと思うので、カタログには原版を載せました。しかしながら、本来のプロジェクトは、ここでの展示のことでありませんが、実際手にとって本に触れることのできる体験型の展示にする予定でしたのでその点については譲歩しなければなりませんでした。

最後に IBBY の業績と短所について考えてみたいと思います。公表されている目標である IBBY の各国支部が国際アンデルセン賞やオナー・リスト(優良図書)のために選定した書籍の翻訳版の振興に、より積極的な国際的取り組みができるのではないかと思います。展示会やカタログを通してこれらの本の振興にできるだけのことはしておりますが、原語版でさえ入手しにくい場合がある上、翻訳版の発行は個々の出版社に任されています。こういったことはたまにあることですし、IBBY のこの賞は一流の推薦であるとみなされてはいますが、必ずしも時流に乗ったものとは限らないのです。こういった意味で、注目すべきは、中国の河北出版社が最近、開始した国際アンデルセン賞の一連の受賞作品 30 作品以上を中国語に翻訳するという編集プロジェクトです。

昨年の IBBY50 周年パーゼル大会での IBBY 朝日国際児童図書普及賞を受賞したアルゼンチン「読む権利のために For the right to read」プロジェクト、セシリア・ベッターリを引用して締めくくりたいと思います。イエラ・レップマンも、今から引用するこの言葉が IBBY の理念を明確に表していると私たちと共に心から賛同してくれることでしょう。

「私たちは食べなければ考えることはできません。しかしながら、考えなければ将来がないことも知っています。誘惑に負けそうになることもあります。パンと本、両方が必要なのです。社会的財産としての文化は誰にでも平等です。だからこそ「読む権利」のために力を尽くすのです。重要さが性急さに取って代わらないように。そして、読書は単なる読書ではありませんし、愚かな人が信じるように本は単なる本ではありません。本は常に人なのです。知識とコミュニケーションの社会的実践の場としての読書は、実践者の感情を巻き込まなければ真の価値はありません。私

たち個人が理解と知識、感情をもって共通の文化遺産にすることにより、読書に意義をもたせるのです。」 ありがとうございます。

* 国際アンデルセン賞受賞者のカタカナ表記は、『国際アンデルセン賞の受賞者たち 1956-2002』 IBBY 編著に従った。

ジェイ・ヒール氏:

皇后陛下、ご列席の皆様こんにちは。

私の人生で音楽は非常に重要なものです。楽器は弾けませんし、音楽についての知識はほとんどありません。しかしながら、私に多大な影響を与えるのです。なぜ惹かれるのかということが分からなくても情熱や偉大さを感じ取ることができるのです。音楽は魂を揺さぶります。私の国際アンデルセン賞への関わりについても同じことが言えるのです。素晴らしい文章とイラストとの出会いは全く同じ偉大さを感じさせてくれます。

8 年間にわたり、国際アンデルセン賞の受賞作家や画家と共に仕事できたということは光栄なことです。半分は審査委員として、残りの半分は審査委員長を務めました。非常に困難な仕事です。私が審査委員を務めておりました頃には作家賞と画家賞の両方の選定を行わなければなりませんでした。そのため審査委員たちは非常に大きな任務を背負っていました。一方では言葉と文学に精通し、世界の主言語で書かれたあらゆる年代層の文学を審査しなければなりませんでした。そして他方では、あらゆる文化圏からの芸術的な表現方法によるイラストを比較分析しなければならなかったのです。現在審査委員会は二つの部門に分割されましたので、文章かイラストどちらかに集中することができます。しかしながら現在でも多様性は考慮に入れなければなりません。

国際アンデルセン賞の選考手順のまず第一歩は、審査委員長による 2 つの部門の審査委員の選定です。実際には、子どもと児童図書にどれだけ関わってきたかということが文学における高度な学術的知識よりも優先される場合があります。また多言語に精通していることも多様な芸術文化の経験と共に考慮に入れられますし、地理的にも均衡が取れるように世界各国からの審

査委員の選定も必須です。

審査委員の選定が終わり IBBY 理事の承認を待って、次は審査委員全員が審査の基盤となる審査基準を考察し理解しているかどうかの確認をします。確認方法は審査委員長によって様々です。良い児童文学とは何かということを常に評価していることになりまますから、貴重なプロセスであるといえます。後ほど詳しくこのお話をしたいと思います。合意された審査基準に基づいて、審査委員は候補者一人一人を審査するという大仕事に取りかかります。関連資料に目を通し、提出された本を審査し、おびたしい量のメモを取ります。

2002 年審査委員は、各部門で 27 名と 28 名の候補者の審査を行いました。9 月に本の読み込みが始まります。翌年の 2 月には審査委員長が予備投票を呼びかけます。審査委員一人一人が 8 人まで候補者を絞り、集計結果が回覧されます。こうして、どの候補者が有力候補であるのかということが分かり、審査委員は、その候補者たちを注意深く見るようになります。審査委員の正式な会合中の予備投票で一票も獲得しなかった候補者は、審査委員の判断によっては、それ以後の考慮の対象から外される場合もあります。

28 名の候補者が 20 名程度に絞られ、審査委員会の 2 つの部門はパーゼルクまたはそれ以外の場所に集い、作家と画家についての会合を別々に開きます。審査委員長、IBBY 会長、そして事務局長も同席いたします。ここでは順番に候補者一人一人を審査します。各審査委員がそれぞれの候補者について意見を述べ、その後候補者を 8 名に絞るために無記名投票が行われます。その後、再び各候補者についての協議が重ねられ、4 名に絞られ、その後の手続きを経て受賞者が選定されるのです。各出席者が発言権を持っていますが、その中で審査委員のみが投票権を有しています。稀に票が割れた際は、審査委員長が決定票を投じます。国際アンデルセン賞審査委員が、どれだけの重責を負っているかということがお分かりいただけたと思います。

審査基準について考察する際に、私はたいいてい規定に使われている正確な文を読み直します。そこには、国際アンデルセン賞は、「傑出した価値により、長らく子どもと青年向けの本に貢献してきたと認められる、作家および画家の全業績に対して授与される」ものです。本日は傑出

した価値、永続的貢献、全業績という 3 つのキーポイントについてお話ししたいと思います。

まず傑出した価値についてお話しします。もちろん審査委員にとって文章やイラストの美的資質が審査上の原点であることは異論のないところです。突き詰めると、その文章とイラストにどれだけの価値があるのか、ということです。十代向け小説、民話の伝統、空想冒険絵本などのジャンルの背景を考慮に入れて評価されなければなりません。審査委員は子ども向け文学を評価していることを忘れてはなりません。子どもの視点から物事を見る能力に長けていることが条件なのです。

作家賞の審査では、本のあらすじ、登場人物、形式、構成、また文体に注目します。本の中こうした要素の良質な部分をどのように判断するかというと、作家が読者の間に本による架け橋を架ける能力があるかどうかということに尽きます。本という橋の一方の側にいるのが作者で反対側に幼い読み手があります。画家賞の審査では、画家としての技量、ふさわしい画材の選択、レイアウト、文章と絵の関わり方などに注目します。文章と絵、どちらも視覚に訴える文化であり、芸術性が織り込まれており、そのあり方は微妙な相違があり、審査委員はその違いを年頭においておかなければなりません。

国際アンデルセン賞の授与に関して審査委員はまあまあのレベル以上のものを求めています。斬新で選択した表現手段に精通している作品を選びます。私は自分の受けた印象を分析しようとする傾向があるのですが、それでも、時々全体から受けた印象で、直感的にこれは良い作品だ、という結論に達することがあります。審査委員は受賞者の選考の際、各候補者の代表作として提出された実際の本を読んで審査します。

次は、永続的貢献についてお話しします。国際アンデルセン賞は将来的に、または既に古典として確立している作品など永続的価値のある本の作者を表彰します。おそらくそういった作品は自由や、尊厳、真実、愛、攻撃性、喜びといった普遍的なテーマと人間的価値を描いており、単なる娯楽としての作品よりはるかに楽しめる本なのです。子どもの好奇心と文学上の想像力を伸ばすような作品であるかもしれません。それが子どもへの貢献なのです。また、候補者の母国の児童文学へ対しての永続的な貢献度についても考慮に入れます。青少年向け文学の発展に

寄与してきたか、本を執筆したり、絵を描いたりする以外の形で貢献してきたかどうかということ判断するために提出された関連資料を審査します。

続いて、全業績についてお話しいたします。幸いなことに、審査委員は各候補者の全作品を受け取るわけではありません。選別された作品のみを受け取るになっています。ということは、各国支部が、各候補者の業績が集結した代表的な作品を提出することが非常に重要になってきます。審査委員は、国際的にも評判を得て何ヶ国語にも翻訳されている候補者の評価と、多大な業績があるにも関わらず経済上の理由などから、一つの言語または一文化圏にのみ制限されてしまっている候補者の評価と間に不公平がないようにしなくてはなりません。この点から言語という厄介な問題に直面します。

2002年は28名の作家と27名の画家が国際アンデルセン賞にノミネートされました。作家部門を担当した審査委員は中国語、クロアチア語、英語、デンマーク語、オランダ語、フィンランド語、フランス語、ドイツ語、ギリシャ語、アイスランド語、日本語、ノルウェー語、ポルトガル語、スロバキア語、スロベニア語、スペイン語、スウェーデン語、トルコ語で書かれた本の審査をしなければなりません。芸術は世界共通語であるとは言われているものの、ヨーロッパ、南アメリカ、ロシア、中国、日本の文化の伝統は実に多様です。審査委員は知っている言語を駆使して読んだ後、翻訳や、要約されたものなど他者の意見に頼ることになります。遺憾ながら、世界的な主言語である英語、フランス語、ドイツ語、スペイン語に翻訳されている候補者は有利であると言えます。

ここでまた私の個人的体験を例にとってお話しいたします。アフリカンス語はズールー語、コーサ語に次いで南アフリカで最も話されている言語です。南アフリカの児童文学の大部分はアフリカンス語で書かれており、すべてが英語に訳されているというわけではありません。例えば、南アフリカから尊敬されていて素質を十分に備えたアフリカンス語の児童文学作家の作品をノミネートしたとします。そのアフリカンス語で書かれた本を何とか読むことができるのは、オランダ語を理解できる審査委員だけです。そこで他の審査委員に理解できるようにするために経費をかけて、おそらく英語に翻訳することになるのですが、翻訳の過程で作家のオリジナルの文体や技能が失われてしまう可能性があります。

審査委員会の審議の中では英語が使われていますが、2002年の関係者13名中2名のみが英語を母国語とする人でした。過去10回の国際アンデルセン賞をふり返ってみると、作家賞はオーストリア、オーストラリア、オランダ、ノルウェー、アメリカに各2回、1994年のまど・みちお氏の受賞で日本、イスラエル、ブラジル、イギリスに1回授与されています。画家賞は1984年の安野光雅氏の受賞で日本、オーストラリア、チェコスロバキア、オーストリア、チェコ共和国、スイス、ドイツ、フランスそしてイギリスに2回授与されています。私も出来る限り世界を網羅しているのです。私は個人的には、いつの日か国際アンデルセン賞があまり知られていないの国の出身者で小さな子ども向けに笑いを誘うような本を書いている資質をもった作家に授与される日が来ることを望んでいます。ユーモアは決して真剣に受け止められるものではないからです。

国際アンデルセン賞の審査委員はたった一つの目的のために会していると思われがちです。つまり次期国際アンデルセン賞受賞者の選考のためです。それは確かなことなのですが、それ以外のことも行っています。審査委員会はIBBYの会員が一同に会し、それぞれの経験、知識、熱意を共有するための多くの機会の一つなのです。

私の人生談をここで披露するつもりはないのですが、経験に基づいてしか自分自身の説明ができません。正直なところ、なぜ私が国際アンデルセン賞の審査委員に抜擢されたのかその理由は分かりません。ピーター・シュネックは真実を知っていたと思うのですが、ついにその秘密を教えてくださいません。これまで南アフリカ出身の人間がいなかったためどんな人間なのか見てみたかったという理由かもしれません。(笑)

審査の場で、他の審査委員の経験の豊富さに触れ、謙虚な気持ちになりました。しかしながら審査委員として二期務めるころには非常に多くのことを学びその知識を南アフリカに持ち帰ることができたのです。10名の審査委員長のうち、今までのところほぼ全員が審査委員を務め、経験を積んでいます。IBBYの創始者であるイエラ・レップマンは例外で、彼女にのみ適用される規則があったのでしよう。

国際アンデルセン賞の存在自体が私にとっての学習経験になっているのです。国際アンデ

ルセン賞に関わっていることで、1999年に日本にお招きいただきました。IBBYのおかげで驚異的な多岐にわたる日本のイラストレーション技術をさらに学ぶことができました。国際アンデルセン賞の全課程が知識を広く共有できる場であり、より多くの人、より多くの国が児童文学の質をさらに向上できるよう奨励するものなのです。日本では児童文学を真剣に受け止め、その価値を認め、児童文学作家に敬意を表しています。しかしそうでない国もあるのです。

数年前に、南アフリカで児童文学の一流の作家であるレスリー・ピークがスウェーデンで開かれた本に関する会議に招かれました。現代のブッシュマンの少女のお話である「バオバブの木と星の歌」という彼女の小説がスウェーデンで大変な賞賛を受けているのです。彼女がスウェーデンに到着するとビルジッタ・フランソンが彼女の所に来て

「あなたは、スウェーデンではとても有名なのですよ」と言いました。南アフリカでは知名度の低いレスリー・ピークはそれを聞き、泣き崩れそうになったといいます。南アフリカでは子どもの本の作家や画家を対象にした賞は皆無に等しく、ほとんど国民の注目を浴びることもないのです。

幸運にも私が国際アンデルセン賞に関わることができたことで、南アフリカの子どもたちに質の高い本を提供することの重要性が認識され、焦点を当てることに少しでも貢献できたと思います。そのために私どもは来年9月のIBBYケープタウン大会開催に向けて尽力しているのです。初のアフリカにおけるIBBY大会開催になります。テーマは「アフリカのための本」で、開会式のメインイベントとして2004年の国際アンデルセン賞授与式がとり行われます。

交響楽団が素晴らしい演奏をすればソロ演奏者は賞賛され、指揮者はおじぎをし、作曲家が存命していれば評価を受けるでしょう。しかしながら楽団の演奏者一人一人の名前は誰も知りません。私にとっての過去50年間以上にわたる国際アンデルセン賞の英雄は審査委員一人一人であります。審査委員の名前は、先ほどリーナ・マイセンが皆様にお見せしたIBBY出版の国際アンデルセン賞に関する素晴らしい本の後ろに明記されています。リーナ・マイセンとエヴァ・グリストラップによって入念に調査したものです。歴代審査委員の名前を見ますと、著名人を見つけることができます。ジョー・テンフォーは世界中の誰よりも多くのIBBY大会に参加したと思われるし、アイリーン・コルウェルはイギリスのストーリー・テラーの権威であります。リチャード・バムバガーはIBBY創始者の一人であり、アン・ペロースキーは再びIBBYの理事になっ

ています。アナ・マリア・マシャドは国際アンデルセン賞の受賞者の一人でもあります。1956年以来審査委員たちは、審査に審査を繰り返し、世界中から児童文学の最高のクリエイターを選定し、さらにはこの重要な活動に対し最高の賞賛を与えるという任務を務めてきたのです。

IBBYが組織として賞の運営を行っています。日産自動車がスポンサーとして賞の現実性を保証し、IBBY会長、理事長、国際アンデルセン賞審査委員長それぞれのアドバイスをします。しかし実際の膨大な仕事をこなし、投票権と決定権を持つのは、審査委員なのです。

8年間にわたる国際アンデルセン賞との関わりの中で残念に思うことが一つあります。それは国際アンデルセン賞の審査委員がほとんど賞賛と評価を受けていないということです。6ヶ月の間報酬なしで働き、多くの場合自費で審査委員会に出席しているにも関わらず、賞賛や報奨を受けることがほとんどないのです。しかし褒美の代わりに、国際児童文学の作家と画家が今またここに子どもの人生と想像力を高めるために世界で最高の賞を受賞した事実を知っているという満足感を得ます。その音楽の鳴り止むことがありませんように。ありがとうございました。

エイダン・チェンバース氏：

皇后陛下、ならびに、皆様方、お越しいただきありがとうございます。

私はどのように本を書くのかについて話をするようにと頼まれました。まず、本題にはいりません前に、お礼を述べさせていただきます。日本に来たのは今回が初めてです。以前からは是非とも来たいと思っておりました。今回は、招待を受けたところしか行けませんが、また、日本からの仕事の依頼も今回が初めてです。イギリスのIBBY支部からもよろしくとのこと。滞在中、多くの方にお世話になっております。皆様方に、大変な歓迎を受けまして、本当にありがとうございます。

本日は、印刷されたもの、すなわち、本がテーマですので、何か活字になったものをまずお見せしようと思います。これから紹介しますのは、まさに私が伝えたいことです。

<<スライド投影>>

*引用文(スライドに映し出されたものを読む)

- 人は、なぜこうも、告白せずにはいられないのでしょうか。聖職者に、友人に、精神分析医に、

親戚のだれかに、敵に、ほかにいなければ自分を拷問する者に対してまで、相手がだれであれ、思いのたけを打ち明けられさえすればそれでいいのです。どんなに秘密主義の人でも、日記に書くだけかもしれませんが、告白をしない人はいません。物語や小説、詩を読むと、とくに詩はそうですが、私はよくこう思います。これらはみな、創作の技法を使ってわれわれ読者になにかを打ち明けている、作者自身の告白にすぎないのではないかと。事実、私が生涯変わらずに情熱をもち続けてきた、読書という、心の支えとなり、つねに唯一最大の楽しみであった営みをふり返って見る時、それこそが、私にとって読書がこんなにも大きな意味をもっていた理由だと思ふのです。もっとも価値のある本、価値のある作家とは、私自身が告白したいと思っている、人生についてのさまざまなことから、私に向かって、あるいは私に代わって、語ってくれる本や作家なのです。 -

これは私の作品、*Postcards from No Man's Land* 『二つの旅の終わりに』からの抜粋です。つい最近、日本語訳も出ました。これを語った、というより書いたのはオランダの70歳代後半の死を前にした女性です。私はオランダの高齢の女性ではなく、イギリスの老人で男性です。そこで問題になってくるのは、当然、イギリスの高齢男性である私が、どうやって、オランダの高齢女性になりかわって書けるのかということです。これは私に限ったことではなく、小説家に共通のジレンマです。書くことにルールはありません。唯一のルールは、ルールを自分で作るということです。

長い作家生活を通して、私は自分なりのルールができてきました。私の処女作は1965年に出版されました。これを書くことは作家としての私を発見する旅でもあり、また、一読者としての自分自身を発見するための旅でもありました。私は作家であるがゆえに読み、かつ、読者であるがゆえに書きます。実際、私にとって、書く事と読む事は同じ事です。書きながら、読んでいます。読みながら、書き直しています。たとえそれが自分の作品であれ、他の人が書いたものであれそうです。

自分のルールを探し出すまで、ずいぶん時間がかかりましたが、そのルールとは次のようなものです。私がものを書く方法は2つあって、一つは、読者が読みたいものはどんなものかを私が理解して書く場合です。読者は読みたい本がどんな本かを把握していて、何をテーマにした本

が読みたいかがわかっています。どのくらいの長さの本がいいかもわかっています。挿絵付きの本がいいかどうかもわかっています。どんなことばで書いた本がいいかも知っています。そして、作家は、多くの場合、どの層の読者が自分の作品を読むことになるか、あらかじめわかっています。これは一種の技です。尊敬すべき技能であり、大概の場合、本はこの技能を使って書かれます。私もそういう方法で10年間、書いてきましたが、その結果、私は自分がずいぶん不器用な作家であることがわかりました。そういう方法が本当に苦手でした。40冊以上本を書きましたが、そのほとんどが今現在では出版されていません。そして、皆さんに感謝されるかもしれませんが(笑)、実は、これまでは一作として日本語訳になりませんでした。といいますが、実を申しますと英語以外の言語に翻訳されたものはひとつもありませんでした。

その後、何も計画を練らずにある本を書き始めたことで、作家としての自分について私自身が知っているすべての事を見つけました。私が本を書いているときは、実は読者の事など何も考えずに書いているということに、この本を書き始めたおかげで気づきました。書いている際中、この本は何を意味しているのだろうか、この本はどうなりたいのだろうか？ということだけを考えていました。とても複雑ですが、皆様になんとかわかりやすくお伝えできればと思います。話は単純ではないですが、きちんと説明しようと思います。こういう状況で本を書き始めるのは、例えて言うと、「ひとめぼれ」のようなものです。日々、私達はいろいろな人に接します。その全員に恋をするなんてことはありません。もし、そんなことになったら、大変です。実際何回、そういう恋ができるのかわかりませんが、「ひとめぼれ」をするのは、何百人と知り合う中で、あるいは千人の中の、1人、せいぜい2、3人くらいでしょうか。

これは一体何を意味するのでしょうか。シェイクスピアの『ロミオとジュリエット』に、その答えが書いてあります。初めは何がなんだかわからないものに対して、まず恋が始まります。性格も特徴も何もわかりませんが、そのわからないということも魅力のひとつです。不思議なほどに本能的な感覚が冴え、それでいてそれが何なのかあなたはわからない。体は熱くなり、後頭部の毛が逆立ち、大量に汗をかき、体がぶるぶると震え、わななき、相手のこと以外は何も考えられなくなる。友人は、あなたは気が違ってしまったと思うでしょう。そうです、確かにシェイクスピアは、恋に落ちることはある種の狂気だと言っています。

本を書き始めたときに、私はまさにこんなふうに感じます。あたかも見た瞬間に恋に落ちるか

のようです。しかも、なぜたまたまその日のその瞬間に、本がそう私に感じさせるのか、私には説明できません。

そして、「ひとめぼれ」したその次には、ほかの誰とでもなく、その人とだけ一緒にいたいと思います。ほかの誰とでもありません。相手についてすべてを知りたくなります。そして、自分のことも全部相手に知って欲しいと思います。これはたちまちトラブルを引き起こしかねません。なぜかという、その恋が終わったあかつきには、相手に自分の秘密を全部握られてしまっているからです。相手が友達にその秘密をばらしはじめたら、それは大変です。ですから、「ひとめぼれ」をするときには、その後のリスクを覚悟しておいた方がいいですね。あなたの身上に大変なことが起きるかもしれません。裁判沙汰になるかもしれません。公衆の面前で秘密をばらして恥をかかされることになるかもしれません。もし恋から醒めてしまったら、恋をしたことをその後一生後悔するかもしれません。

同じ事が本についても言えます。私の心に入り込んできた得体の知れないアイデアについてすべてを知りたくなります。私の体温は上がり、後頭部の毛が逆立ちます。汗もたくさんかきます。そしてなんだかものすごく不快になります。なぜなら、このアイデアのこと以外のことは一切考えたくなくなるからです。そして、まず真っ先に、思いつく事すべてを書き留めますが、これは結局、登場人物の素材になるのが普通です。私は実際に書き始められるようになる前に、見つけ出さなくてはならないことがいくつかあります。

まず、はじめに必要なのは名前です。「ひとめぼれ」をしたら、まさき相手に尋ねることのうちのひとつは、「お名前は」でしょう。名前はとても重要です。私たちが何であるかを形成するのに名前は実に大きな意味があります。

私の名前は、エイダンです。これはケルト語で、英語でもフランス語でもありません。ケルト語で、“火”を意味しています。これを逆から書くと、“Nadia”となり、これはロシア語では、女の子や女性につけられる名前です。“希望”を意味しています。同じ名前は、アラビア語でもトルコ語でも、イスラエルのヘブライ語でもあります。この話をすると、どこでも、“ああ、私たちの使っている言葉でもそういう名前はあります”と、言われます。そして、そういう例のひとつひとつが、意味が

あり、どれも美しい意味を持っています。名前は大事なのです。

日本に到着したとき、入国審査で一時間待たされました。審査官にパスポートの提示を求められましたが、私のパスポートには“エイダン”の記載はありません。エイダンとは違う名前、両親がつけてくれた名前が記載されています。その名前が私は嫌いでした。私が世間に知られるようになり始めた頃、私の名前を自分で自分につけようと、決めたのです。私の名前はエイダンです。これは“火”を意味します。何かする時に火のように情熱的にならずにできるものはあるでしょうか。これは“希望”を意味します。希望以外に、私たちには何があるでしょうか？

私たちは皆、せいぜい失敗しかできません。何か成功できると思っている人は誰でも、悲惨な人生が待っています。唯一希望があるとすれば、自分が失敗するということを知っているということであり、だからこそ、成功すれば大きな幸福を感じるのです。私には希望がすべてです。私が書く登場人物についても同じ事が言えます。書き始める前に登場人物の名前を私は知っていません。それははしかるべき名前ではなくてはなりません。

私が最初に引用した『二つの旅の終わりに』について言うと、主人公の少年は、ジェイコブ・トッドと言います。ジェイコブは、ヘブライ語の旧約聖書の人物で、天使と戦います。名前はトッドですが、これはドイツ語で死を意味します。“on your todd”と言いますが、英語で言うと“on your own”です。少年ジェイコブは、確かに天使と戦います。そして、なぜか、死とかわります。そして、彼は自らの力で生きていくのです。これが、この登場人物のすべてを表しています。

時には、顔を合わせる前に電話を通じて恋が始まることもあります。不思議な現象です。一度も顔を合わせたこともないのにどうして恋をするのでしょうか。こんなカップルは確かにいます。どうして電話だけで恋に落ちるかという、その答えは、声にあります。声は言葉を使います。ですから、性格が表れる声に何かがあるのです。性格が表れる一人一人の使う言葉づかいに、何かがあるのです。一人一人喋り方は違います。同じ話し方をする人は2人といません。私たちが作る音楽ともいえる声は十人十色です。母国語を基盤に、自分自身の言葉を私たちはそれぞれが持っているのです。

同じことが本の登場人物についても言えます。本は一作ずつそれぞれがそれぞれの方法で読者に語りかけます。もし皆さんが私の著書を比較していただければ、使われている英語は決して同じでないことに気づくと思います。登場人物の話し方もそれぞれ異なります。どうしてかという、登場人物の話す言葉は十人十色だからです。ですから、私は、どんな言葉が話すが頭に浮かぶまで、本を書き始める事はできません。

次に私が知らなくてはならないことは、話がいつ、どこで起こるかということです。私の場合、舞台は常に実在の場所です。『二つの旅の終わりに』の舞台はオランダで、1 ページ目はアムステルダムから始まります。そして、少年が行くところを追っていくと、いずれも実在する場所であることがわかります。少年の経路と同じところを辿る人がいるようです。読者かファンレターの E-mail から判断して、とても多くの人が同じ道をたどっているようなので、私はオランダ政府に対し、『二つの旅の終わりに』を読んでオランダを訪れた人の数だけ著作権使用料を請求しようかと考えているくらいです。舞台は私が知っている場所です、なぜなら、私がそうするのがいいと考えるからです。私は夢想家ではありません。ファンタジーは好きではありません。そういう本はめったに読みません。私が知っている世界、場所に住み、私が知っている言葉が話すような人物を登場させます。そして、これらの要素が揃ってはじめて、私は本を書き始める事ができます。

その次の問題は、一番大変な部分です。口頭であれ、筆記であれ、どんな小説も伝えなくてはなりません。伝え方にはいろいろな方法があります。例えば、本にして伝える場合は、章で区切るか、区切らないかとか過去形を使うか、現在形にするかとか登場人物が考えている事、感じている事を伝えることにするか、しないかなどどんな形で伝えようかと考えます。通常、私たちはこの作業をどういう形式にするかと言います。

『二つの旅の終わりに』の形式はとてもシンプルです。これは実際にはおとぎ話です。ひとりの純真な少年が、言葉の通じない、見知らぬところを訪れます。そこで、さまざまな試練を通して、自分自身について、今まで気づいていなかったものを発見していきます。風変わりな人々と出会い、それに負けないで生き抜いていかななくてはなりません。それができて初めて、この少年は、人生を学び、自分自身についても知ることができるのです。それは他の方法では学べなかった

ことでしょう。話そのものは単純ですが、一冊の本の中に二つの話を存在させる形式にすることで、複雑な構成になっています。

現在執筆中の本は、清少納言の『枕草子』をもとにしています。それもあって、今回、日本に來たいと思っていました。『枕草子』は世界の名作のひとつで、すばらしい本です。『枕草子』は典型的な日本的形式で書かれています。他の文化圏でこのような形式で書かれた本を私は知りません。実に融通性に富んだ形式で、書きたい事はなんでも盛り込めます。そして、もうひとつ特徴があります。枕草子には、短歌という形式の詩歌がはいっています。私が知っている限り、和泉式部の短歌が一番すばらしいと思います。和泉式部は、非凡な女性で、清少納言とまさに同年代に生きた女性です。清少納言は、『源氏物語』を書いた紫式部と同時代の女性で、源氏物語は、今までの文学の中でも最初の偉大な心理小説の一つです。

これら3人の女性は、- 男性ではなく3人の女性が - 極めて男性中心社会の中にながら、最も卓越した文学上の形式を用いて、作品を作っています。想像力をふんだんに使って描かれた枕草子は、現実の生活を元にして、様々な種類の作品、一説が集まって出来ています。とても短く繊細な歌もはいっています。それは、ある一定の形式にのっとった簡潔な形でありながら、その中にすべての感情と意味を込めています。源氏物語は長編小説ですが、一見男性を描いているようで、実は女性を描いた小説です。それで、男性読者はあまりいないのでしょう。

今度の私の本にはある形式があります。すみません、通訳の方には事前にお伝えしていませんでしたが、*This is All the Pillow Book of Cordelia Ken* というタイトルの本を出す予定です。名前に注目してください。コーディリア ケンが主人公です。この人は少女です。69 歳である男性の私が、どうやって、15, 16, 17, 22 歳の少女のことを書けるでしょうか。でも、これが現在の私そのものなのです。

それがどうやってできるかご説明します。5 年前であれば、この本を書くことは不可能だったでしょう、10 年前でもできなかったでしょう。日本にいた間に、ずっと観たいと思っていました能を観る予定です。能について読んだ知識からすると、能では、非常に年を取った男性が、非常に若い女性の役も演ずるとのことです。しかも、実際の若い女性が演ずるよりも、もっとうまく演ずるそ

うです。しかも、それができるようになるまで、役者として 40 年以上もかかるというのです。

私は 40 年以上をかけて、17 歳の女の子がどんなものであるかを、実際のその年の女の子よりもわかるようになりました。能役者のように仮面をつけているからこそそれができるのです。いかにしてシンプルに、それと同時に、いかに複雑になるかを学んでいるから、それができるのです。関節が固くなっても、少女のようにダンスや歌を学んでいるから、可能なのです。私に物語を書かせる力となったのは、ちょうど 1000 年前に生きていた女性が私には読むことができない言語で書いた物語なのです。力を得たときに登場人物が自分の中でふくらみはじめ、生き生きとしてきます。「ひとめぼれ」をした相手が次第にあなたの前にはっきりと姿を現してくるかのように、登場人物が自ら命を持ち始めます。そして、相手は、当初自分が考えていたような人とは違うという事がわかる。しかも考えていたよりももっといい相手だったとわかる。そんなふうに展開してきます。そこまで来て、やっと私は書き始めるのです。

本を書く時点まで少なくとも 3 年かかります。そして、実際に執筆を始めるまでにさらに 3 年かかります。そして、第二段階が始まるのです。私は書き始める時点では、ストーリーについても、登場人物についても、知っておかなくてはいけないことはすべて把握しています。そして、書き始めるやいなや、実は何も知らないのだということを悟ります。そしてどうなるかという、毎日朝の 10 時から 12 時まで鉛筆を走らせていく中で、登場人物やストーリー、そして私自身について、書き始めるまでには知らなかった部分に出会うのです。本を書き終えたときの私と書き始めたときの私は同じではありません。今日ここで皆さんにお話をしているエイダン・チェンバースは、*This is All the Pillow Book of Cordelia Ken* を書き始める前のエイダン・チェンバースと同じではありません。私は文字通り、違った人物です。それでいて、私はあくまでも私です。

時間の制約もありますので、これで終わりにします。ここまでの話、ご理解いただけましたでしょうか。以上が私のすべてであると同時に、これまでのお話ではちっとも私の説明になっていないとも言えます。ご理解を深めたい方は、どうぞ禅寺をお訪ねになって、このことを聞いてみてください。 (笑) どうもありがとうございました。